

特集にあたって

群馬大学整形外科 筑田博隆

物をみつけるとき、大切なことは、どこに何があるのかを知っていることです。たとえば、満天の星空を見上げたとき、星座についての知識があれば、すぐに夏の大三角形を見つけられるでしょう。夜空に目が慣れてくれば、次第に天の川も見えてきます。天の川を地平線の方にたどっていくと、今度は赤く光るさそり座のアンタレスが見つかります。脊椎手術においても、どこに何があるのかかわかっていれば、術野の中でさまざまなものが浮かび上がって見えてきます。「わかればみえる」というわけです。

複雑な脊椎手術を行うには、術野の中のさまざまな組織について、その走行、重なり、位置関係を十分に理解していることが重要です。しかし、通常の解剖アトラスを開いてみても、脊椎手術に必要な局所のディテールについては、わかりやすい解説がありません。本特集では、手術の際に必要な局所解剖にフォーカスをあて、エキスパートの先生方に、実際の手術手技と対比しながら解説していただきました。脊椎周囲の血管の走行、横隔膜の付着部と胸膜の関係、硬膜の膜構造といった実践的なポイントを、シェーマをふんだんに用い、わかりやすく図示しています。「これを読めば、術野をみたときの解像度があがる」—そんな特集号になったのではと思います。手術の前に本誌を開き、複雑な手術を行う際の「道しるべ」として活用していただければ幸いです。